Artpoint Reports

2023

東京アートポイント計画

–

HAPPY TURN／神津島

–

Artist Collective Fuchu［ACF］

–

ファンタジア!ファンタジア!
—生き方がかたちになったまち—

–

ACKT（アクト／アートセンタークニタチ）

–

多摩の未来の地勢図
Cleaving Art Meeting

–

カロクリサイクル

–

KINOミーティング

–

めとてラボ

–

Tokyo Art Research Lab

2023 → 2024

Artpoint Reports 2023→2024

はじめに

東京アートポイント計画は、地域社会を担うNPOとアートプロジェクトを行う文化事業です。2009年にスタートして、今年で15年目。わたしたちが目指しているのは、日常や地域に芸術文化が根づき、東京というまちが創造的な場所になっていくこと。そのために、持続的な活動を行うための拠点づくりや担い手の育成、活動基盤の整備なども行っています。
『Artpoint Reports 2023→2024』は、一年を振り返りながら、ちょっと先の未来について考えるレポートです。

もくじ

02 About
- 02 東京アートポイント計画とは
- 04 メンバー紹介

05 News
- 2023の取り組み

08 Voices
- 2023→2024について語る
- 08 日常を耕し、文化を育む種まき
- 12 「いる」ことから越境が生まれる
- 15 つなぎ手になって卒業する
- 18 現場の足腰をつくる事務
- 21 小さな単位に働きかける仕事

24 Annual costs
- 事業予算

25 Projects
- 事業一覧

31 Information
- お知らせ

About

東京アートポイント計画とは

東京アートポイント計画は、地域社会を担うNPOとともに、社会に対して新たな価値観や創造的な活動を生み出すためのさまざまな「アートポイント」[*1]をつくる事業です。東京都、アーツカウンシル東京[*2]、NPO[*3]との共催で行っています。

当たり前を問い直す、課題を見つける、異なる分野をつなぐ——そうしたアートの特性をいかし、実験的なアートプロジェクトを通して、個人が豊かに生きていくための関係や仕組みづくり、コミュニティ育成に取り組んでいます。特徴は、専門スタッフであるプログラムオフィサーが、情報やスキルを提供しながら現場に伴走すること。複数年かけて、NPOが持続可能な活動を行うためのサポートを行っています。

また、アートプロジェクトの実践と研究・開発が連携することで、社会の変化に応答し続けています。

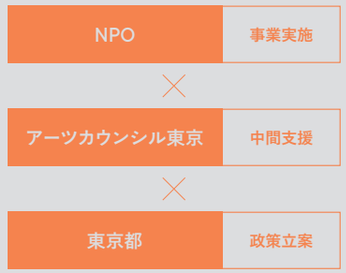
*1 アートプロジェクトが継続的に動いている場であり、その活動をつくる人々が集まる創造的な拠点のこと。アーティスト、運営スタッフ、ボランティア、参加者などさまざまな人によって形成されると考えています。

*2 アーツカウンシル東京は、都内で文化施設の運営や文化事業の実施を行う公益財団法人東京都歴史文化財団の一組織。都の文化政策に基づき、新たな芸術文化創造の基盤整備をはじめ、東京の独自性・多様性を追求したプログラムなどに取り組んでいます。

*3 特定非営利活動法人（NPO）のほか、一般社団法人など非営利型の組織も含みます。共催相手には、市区町村などの基礎自治体、大学等も入る場合があります。

「助成」ではなく

「共催」事業



民間と公共でパートナーシップを組む

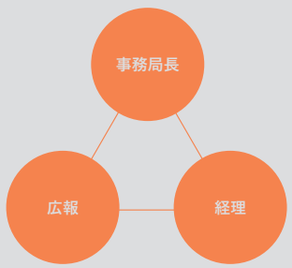
単発の「イベント」ではなく

「プロジェクト」

年間を通した活動が地域文化をつくる

「拠点」だけではなく

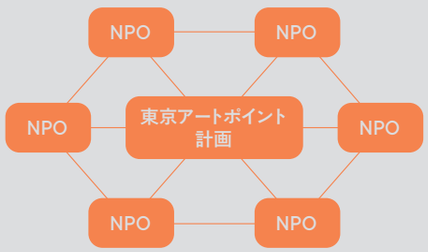
「チーム」育成



持続的な活動のためにNPOを育成

知見を共有する

ネットワーキング

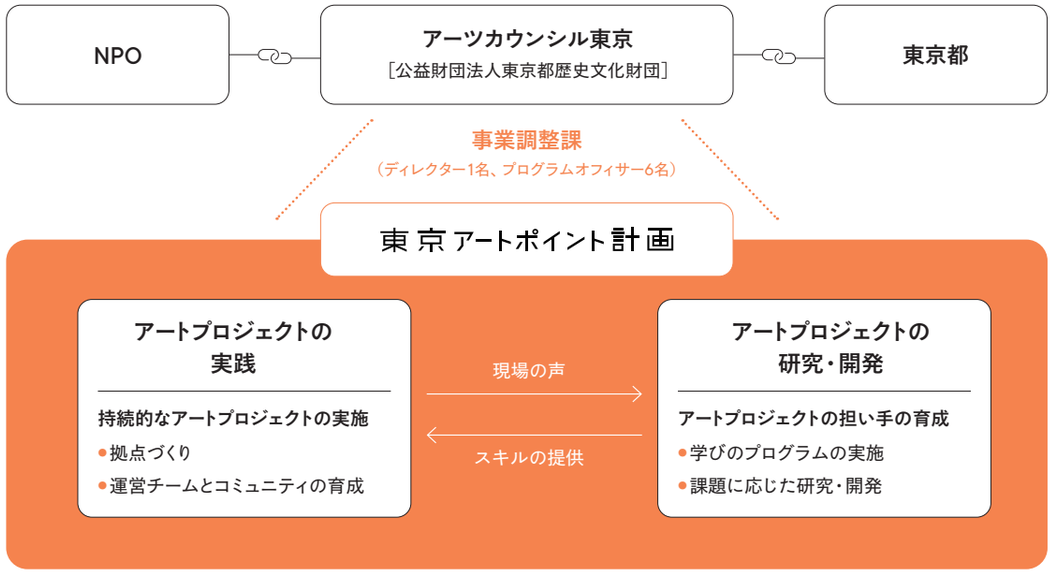


NPOが学び合う関係をつくる

［組織・人員体制］

東京アートポイント計画は、アーツカウンシル東京の事業調整課が担当しています。都の文化政策の目的や課題を読み解き、事業の方向性を模索すること、NPOとの対話を重ねながら社会に向き合い、次の一手をしかけていくことを目指しています。

事業に伴走するプログラムオフィサーは、「政策」を担当する東京都と「事業」を企画・運営するNPOとの間に立つアートマネジメントの専門職です。文化政策と事業の二つの視点を行き来することで、文化事業としての社会的意義を高めています。



▸ 共催団体数｜56団体（2009〜2023年度）

NPO：46
基礎自治体：7（豊島区、荒川区、練馬区、足立区、小金井市、三宅村、国立市）
大学：1（東京藝術大学音楽部・大学院国際芸術創造研究科）
財団：2（公益財団法人せたがや文化財団 生活工房／公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団）

▸ 共催事業数｜45事業（2009〜2023年度）

＊年間約100件のプログラムを実施

▸ Tokyo Art Research Lab（TARL）受講生数｜1,937名（2024年2月現在累計）

▸ 共催団体評価・選定会議委員

太下義之　（2015〜）　文化政策研究者
小山田徹　（2015〜）　アーティスト／京都市立芸術大学 教授
西村佳哲　（2015〜）　プランニング・ディレクター／リビングワールド 代表
荻原康子　（2015〜）　「隅田川 森羅万象 墨に夢」統括ディレクター
竹久 侑　（2015〜）　水戸芸術館 現代美術センター 芸術監督

▸ 外部評価委員

芹沢高志　（2011〜）　P3 art and environment 統括ディレクター（東京アートポイント計画）
吉澤弥生　（2022〜）　社会学者／共立女子大学文芸学部 教授（Tokyo Art Research Lab）

（撮影｜仲田絵美）

メンバー紹介

ディレクター

1 森 司（2009〜）MORI Tsukasa

1960年愛知県生まれ。水戸芸術館現代美術センター学芸員を経て、現職。2020年度より東京都歴史文化財団共通事業「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」も担当している。「“麹と掃除”が自分のなかでいまのトレンドです」

プログラムオフィサー

2 大内伸輔（2009〜）OUCHI Shinsuke

1980年茨城県生まれ。取手アートプロジェクトのTAP塾出身。前職は東京藝術大学音楽環境創造科教育研究助手。現在は全体統括を担当。共著に『これからの文化を「10年単位」で語るために―東京アートポイント計画2009-2018―』（アーツカウンシル東京、2019年）。「最近は、眠っていたレコードを聞き直しています」

3 佐藤李青（2011〜）SATO Risei

1982年宮城県生まれ。小金井アートフル・アクション!実行委員会事務局長を経て、現職。『Artist Collective Fuchu［ACF］』『ACKT（アクト／アートセンタークニタチ）』『多摩の未来の地勢図 Cleaving Art Meeting』『カロクリサイクル』、Artpoint Meetingを担当。「神戸で“災間スタディーズ”をはじめました」

4 櫻井駿介（2021〜）SAKURAI Shunsuke

1990年神奈川県生まれ、東京都育ち。東京藝術大学大学院博士課程修了。インストーラー、アートマネージャーとして活動したのち、現職。『ACKT（アクト／アートセンタークニタチ）』『めとてラボ』、Tokyo Art Research Lab等を担当。「多肉植物の鉢が大きくなってきました」

5 入江彩美（2022〜）IRIE Ayami

1990年茨城県生まれ。水戸芸術館現代美術センターで学芸アシスタント、アートラボはしもとで美術専門員を経て、現職。現在『HAPPY TURN／神津島』『ファンタジア!ファンタジア!―生き方がかたちになったまち―』、Tokyo Art Research Lab等を担当。「毎年冬になるとクッキー缶を買ってしまいます」

6 小山冴子（2022〜）OYAMA Saeko

1982年福岡県生まれ。フリーランスのアートマネージャー、企画者として、さまざまな地域での芸術祭やアートプロジェクトに携わったのち、現職。現在『多摩の未来の地勢図 Cleaving Art Meeting』『めとてラボ』、Tokyo Art Research Lab等を担当。「新しく訪ねた土地では高いところにのぼってみています」

7 川満ニキアン（2022〜）KAWAMITSU Nikian

1994年沖縄県育ち。せんだいメディアテーク企画・活動支援室職員を経て、現職。現在『Artist Collective Fuchu［ACF］』『カロクリサイクル』『KINOミーティング』、Tokyo Art Research Lab等を担当。「寝る前に短歌の本に付箋を貼って、お気に入りを集めています」

2023の取り組み

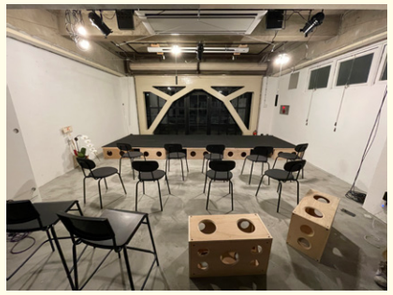
新たな活動拠点が3つできました。

執筆｜川村庸子

手話話者が主体となり、コミュニケーションのあり方を見つめ直す『めとてラボ』は、一般社団法人日本ろう芸術協会と共同で台東区・谷中に視覚で世界を捉える人たちのためのワーキング・プレイス「5005（ゴーマルマルゴー）」を立ち上げました。この地との縁は、ろう者の店主が営むラーメン家『麺屋 義（よし）』の店長が、隣が空き店舗となったことを教えてくれたことがきっかけ。手話を見えやすくする移動可能なライトや、人の気配は感じるけれどプライバシーを守るカーテン、舞台にも椅子や机にもなる什器など、これまでリサーチしてきた「デフスペース」の考え方をもとに、ろう者が過ごしやすい仕組みを考えています。また、この場所を拠点としつつ、今後もよりひらかれた場にするためにさまざまな活動を展開する予定です。

災禍の記録を活用したネットワークづくりを行う『カロクリサイクル』は、江東区・大島にあるUR都市機構の運営する団地に「Studio 04（ゼロヨン）」をオープンしました。東京大空襲や関東大震災、水害など災禍の歴史が地層のように折り重なった土地に根を生やします。

国立市を舞台に行政と市民、市内外の人々が交流し、新たなまちの価値を生み出していく『ACKT（アクト／アートセンタークニタチ）』は国立市・谷保に『さえき洋品●（てん）』をオープン。長らく空き店舗だった築70年ほどの建物を自分たちで改修しました。ぜひ、イベントの際にそれぞれの場所を訪れてみてください。［▶ p.8,12,25］


「5005」の内観

Kunitachi Art Center 2023を開催！

執筆｜川村庸子

『ACKT（アクト／アートセンタークニタチ）』が、アトリエやギャラリー、店舗を巡ってまちを横断するプログラム「Kunitachi Art Center 2023」を16日間にわたって開催しました。2020年から有志でスタートし、今年は4回目。作家がアテンドするまち歩きツアーなども実施し、日常のなかで芸術文化に触れる機会となりました。

くにたち市民芸術小ホールでは、地主麻衣子さん（アーティスト）が、まちを探索して見つけた風景を「ことば」でスケッチして参加者に伝え、そのスケッチから浮かびあがった風景を「え」にするというワークショップを実施。完成した作品はギャラリースペースの壁に展示されました。副産物産店（矢津吉隆・山田毅・足立夏子によるプロジェクト）は、印刷会社・福永紙工の余った紙や旧国立駅舎の古材などを使った作品制作を行うなど、アーティストにとっても、参加者にとってもまちの輪郭を知ったり、確かめたりするような経験が生まれました。

総来場者数は3,101名。「引っ越しを考えていて、まちの様子を知ることができた」「普段の生活のなかでは出会えない人や場所を訪ねることができた」「交流会で出会った人のスペースを後日訪ねて、また話を交わすような関係性になった」などの感想がありました。プログラムがきっかけで、ACKTにボランティアスタッフとして参加してくれるようになった人も。ここでの出会いを日常につなげ、まちとの関係性を育んでいきたいと思っています。

映像コンテンツが108本になりました！

執筆｜川村庸子

コロナ禍をきっかけに本格的に始動した映像コンテンツが108本になりました！　Tokyo Art Research LabのYouTubeチャンネル登録者数は2,540人、視聴回数が1.6万回を超えるものもあります。日本語字幕や手話通訳を入れた映像も7本制作しました。字幕と発話の重なりの調整や、日本語を日本手話へ翻訳する際の意味の調整など、試行錯誤を続けています。

2011年以降に生まれたアートプロジェクトとそれらを取り巻く社会状況を振り返りながら、これからの時代に応答するアートプロジェクトのかたちを考えるシリーズ「新たな航路を切り開く」では、先駆者に話を聞く「3つの航路」を公開。北川フラムさん（アートフロントギャラリー 主宰）、小池一子さん（クリエイティブ・ディレクター）、南條史生さん（キュレーター／美術評論家）に、活動をはじめた当時の時代背景やモチベーション、活動のなかで見えてきた変化や現在地を語ってもらいました。

「応答するアートプロジェクト｜ケーススタディ・ファイル」では、File.13として木版画アート・コレクティブ・A3BCが登場。手を動かしながら語り合い、一つの表現を生み出していく実践を紹介しました。テーマや表現方法について意見を交換しながら集団で制作していくプロセスや、いまこの世界で起きていることを胸に刻み表現すること、日常のなかにおける抵抗の術と連帯について、メンバー7名が語っています。2022年にスタートした本シリーズは完結しますが、これからも時代に応答して生まれてくるさまざまなアートプロジェクトを見続けていきたいと思います。

ジムジム会では「活動拠点」をテーマに活動しました。

執筆｜川村庸子

東京アートポイント計画は、アーツカウンシル東京の「文化創造拠点の形成」事業です。「アートポイント」とは、アートプロジェクトが継続的に動いている場であり、その活動をつくる人々が集まる創造的な拠点のこと。つまり状況や環境を指すため、物理的な場所に限らず、その目的やあり方、運営方法もさまざま。今年は8つの共催団体のうち7団体が拠点をもつことになったため、「事務局による事務局のためのジムのような勉強会」（通称：ジムジム会）では、あらためて「活動拠点」について掘り下げることにしました。

ジムジム会は、それぞれの悩みを持ち寄って運営について学び合う「互助会」のような取り組みです。2019年にスタートし、講座形式で専門家に学ぶところからはじまり、団体同士の交流に力を入れるようになり、コロナ禍ではオンラインでそれぞれの拠点を訪問しました。昨年から互いの拠点を実際に訪れて学び合うようになり、今年はその様子を映像化することで、現場の悩みや発見をより多くの人たちと共有しました。現在、『Knock!! 拠点を訪ねて―芸術文化の場をひらくひと―』というシリーズとして、YouTubeで2本の映像を公開中です。

拠点をひらくことも、続けることも悩みは尽きません。映像では「そもそもなぜ拠点をひらいているんだろう?」という根本的な問いや、「安心してもやもやできる場所」といった実践的なキーワードがたくさん出てきました。引き続き、それぞれの活動に合った拠点のあり方について考えていきたいと思います。［▶ p.8］

『Knock!! 拠点を訪ねて―芸術文化の場をひらくひと―』の撮影風景

Artpoint Meetingを3回開催しました。

執筆｜川村庸子

Artpoint Meetingは、アートプロジェクトに関心を寄せる人々が集い、社会とアートの関係を探るトークイベントです。2023年度は3回開催し、計167名が参加しました。

12回目のテーマ「“わたしたち”の文化をつくる―成果の見方、支える仕組み―」のゲストは、小林瑠音（るね）さん（芸術文化観光専門職大学 講師）と鈴木一郎太さん（アーツカウンシルしずおか プログラム・ディレクター）。それぞれ英国と静岡のアーツカウンシルとの比較を通して、記録や評価、つなぎ役の大切さについて議論しました。また、これまで東京アートポイント計画が発行してきた数々の記録集に対して、小林さんから「世界一丁寧なアーツカウンシルだと思う」という、うれしい言葉をいただきました。

13回目のテーマは「災害の“間”をたがやす」。異なる立場から被災地の人々と向き合ってきた牧紀男さん（京都大学防災研究所 教授）と『カロクリサイクル』の瀬尾夏美さん（アーティスト）が、当事者性を超えた語りや経験を共有するための翻訳の重要性について語り合いました。

14回目のテーマは「わたしたちの“拠点”をつくる　ひらきかたとつづけかた」。三富章恵（ゆきえ）さん（NPO法人アーツセンターあきた 事務局長）と下田展久（のぶひさ）さん（C.A.P.［芸術と計画会議］ディレクター）、『HAPPY TURN／神津島』事務局の飯島知代さんが運営方法や予算、記録など、拠点を運営するうえで直面するさまざまな課題への応答について紹介し合いました。詳細はアーツカウンシル東京のウェブサイト「東京アートポイント計画通信」にあるレポートをご覧ください!

Artpoint Meeting #14の会場風景（撮影｜仲田絵美）

今年も11点の発行物ができました！

執筆｜佐藤恵美

アートプロジェクトの思考や手法を「残すこと」「伝えること」に注力してきた東京アートポイント計画。今年も11点の本やパンフレットを制作しました。なかでも注目の3点をご紹介します。

『まず、話してみる。』は文化事業の現場におけるアクセシビリティがテーマ。Tokyo Art Research Labの『アートプロジェクトの担い手のための手話講座』、東京オリンピック・パラリンピックのリーディングプロジェクト『TURN』の知見を引き継いで展開している『クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー』、そして東京アートポイント計画の『めとてラボ』の、3つの活動のメンバーによる座談会のほか、企画の運営体制や経緯を紹介しています。プログラムを企画・実施するうえでのアクセシビリティへの考え方や課題、展望について語られた座談会は、QRコードを読み取ると、手話と日本語字幕付きの映像でも見ることができます。

『TARLウェブサイト コンセプトブック』もウェブと連動した本です。「資料室」「キーワードから探す」「レポートを読む」といったサイトの活用法ごとにQRコードが添えられ、使い方をその場ですぐに試すことができます。後ろのページから開くと制作過程などを綴ったコラムが掲載され、仕様もユニークな一冊です。

東京アートポイント計画について英語で紹介するリーフレットは、ここ数年、インドネシア・フィリピン・ドイツなど海外からの視察が増えていることを受けて制作しました。組織体制やミッション、社会的背景などを一覧できる内容です。これらはすべて『Tokyo Art Research Lab』のウェブサイトにてPDFを公開中です。

校正中の様子

日常を耕し、文化を育む種まき

入江彩美
IRIE Ayami

小山冴子
OYAMA Saeko

川満ニキアン
KAWAMITSU Nikian

アートプロジェクトの担い手が「拠点」について語り合う
『Knock!! 拠点を訪ねて―芸術文化の場をひらくひと―』。
この映像を見た3人が、東京アートポイント計画における拠点とは何かについて考えます。

曖昧にひらき、変わっていくことで続ける

―― みなさんはこの2本の映像からどんなことを感じましたか?

小山　一口に「拠点」と言っても、地域性も人とのかかわり方も違って、そのなかで試行錯誤するうちにプロジェクトごとの特色が現れてくる。そんな様子が感じられて、あらためて拠点っておもしろいなと思いました。個人的に共感したのは『ファンタジア!ファンタジア!―生き方がかたちになったまち―』(以下、ファンファン)の青木彬(あきら)さんの「たまにピンポイントで刺さった人が拠点に来てくれる」という話。対談相手の吉田武司さんが運営する「仲町(なかちょう)の家」が北千住のまちなかにあって訪れやすいのに対して、ファンファンの拠点である「藝とスタジオ」は墨田の路地のどん突き。でも、刺さった人は目掛けて来てくれるし、100人に一人かもしれないけれど、その人にとって必要な場所になれたらと。それはわたしが文化に携わっている理由でもあって、目立たなくても誰かの小さな関心を次の行動に変えるきっかけになっているのがいいなと思いました。

入江　藝とスタジオの周辺は住宅街なのでイベントの集客には苦労するんですが、対談を終えた青木さんからは「僕たちの拠点は“アトリエ的”に使うのがいいんだとわかった」というフィードバックがありました。対する仲町の家は戦前に建てられた日本家屋で、まちにひらかれた“ショーケース的”という言葉で形容されていて、その違いもおもしろかったですよね。

川満　実際に訪れてみると役割や使われ方が全然違いますよね。わたしは団体が拠点を続けるうえでは、ある程度その目的や軸をきちんともつべきだと考えていた部分があったんです。でも、吉田さんと青木さんが「自分たちでもわからない場所にしたい」「わからなさを共有する仲間を増やしたい」と話しているのを聞いて、ありようを固定してしまうことが、その可能性を狭めてしまうことにもなるのかもしれないと思えて。これまでの視点が揺らぐような拠点づくりのリアルな実感に触れました。

―― 映像では、人に拠点を説明する際、あえて「曖昧な名付け」をしているという話や、そのことでできるだけ「ゆっくりひらく」ことをこころがけているという話もありましたね。

入江　『HAPPY TURN／神津島』の飯島知代さんは拠点「くると」をつくるうえで、場の機能を言い切らないようにしていましたね。機能が曖昧だと大人は警戒しますが、いまはその余白に気づいたこどもが集まる場になっています。そしてその機能はまた変わるかもしれない。曖昧な名付けは変化の余地につながるんだと思います。

小山　変わり続けていい場所であることを担保するために言い切らない、と。名前だけでなく人も雰囲気も変わり続けることで拠点は継続していくのだなと、国立にある『国立本店』の加藤健介さんの話からも感じましたね。加藤さんが2015年に運営を引き継いだ国立本店は、2006年から続く息の長いまちの居場所で、約30人の運営メンバーが日替わりで店長をしている。でも、そのうち半分くらいのメンバーが毎年入れ替わる仕組みがある。ずっと同じ顔ぶれだと役割が固定化されて外の人も入りづらいけど、この仕組みによって変化し続け、場を維持できるんだなと思いました。

この話からはまちの顔も見えてきます。国立というのは、国立本店に会員として参加して、「イベントの企画や本棚づくりをしたい」「人との交流を大事にしたい」という人が毎年15人も新しく集まるまちなんだと。同様に、仲町の家では置いてあったギターで近所のおじさんたちが自然とバンドを組んでいたり、藝とスタジオでは廃材でものをつくる人が多かったり、拠点からその地域性が見えてきますよね。

川満　『カロクリサイクル』では江東区の団地に拠点「Studio 04(ゼロヨン)」をつくりましたが、さっそく団地に住む高齢者や海外にルーツをもつ人が出入りする場になっています。こうした関係性ができてくると、「もっとこんなイベントやって」とか「開いているかわからないからこう表示して」とか、拠点をよくするための要望が寄せられてくる。そのことで自分たちの意図を超えて場が変わるのがおもしろいです。しかも、そういうことを気軽に言ってくれる人たちはいわゆるアート好きや専門家ではありません。そうした声は活動を客観視する鏡になるし、芸術文化の尺度だけによらない影響を与えてくれていると思います。

入江　藝とスタジオでも近所の人にスマホの使い方講座をやってほしいと頼まれたことがありました。意図してなかったことを受け入れていく

仲町の家(吉田武司)×藝とスタジオ(青木彬)と国立本店(加藤健介)×くると(飯島知代)の2本の対談映像をTokyo Art Research LabのYouTubeチャンネルにて公開中!

https://
www.youtube.com/
@tarl302

かどうかは大きいですよね。最近では、ワークショップを開催する日に「ワークショップには参加しないけど、考えごとをしたいから利用したい」という方が来たことも。その人にとっては特別な用事はなくてもふらっと訪れて時間を過ごす大切な場所になっているんだと感じて、うれしい使われ方でした。

日常の創造性を耕し、記憶と人をつなぐ場

―― 拠点を続けるうえでは、お金はもちろん、先ほどの国立本店のような仕組みや地域との関係も大切だと思います。拠点の続け方についてはどんなことを考えていますか?

小山 続け方は本当に難しいですね。お金の面では吉田さんと青木さんの映像でも、運営資金のためにワークショップを有料にしたり、仲町の家を撮影場所として貸したりすることも考えたけど、そのことで本来やりたかったことができなくなるのではないか、物件を貸してくれている大家さんとの関係性はどうなるのかといった話がありましたよね。

川満 そもそもプロジェクトを誰とはじめたのか、という点も重要ですね。Studio 04はUR都市機構と組んでいて、仲町の家は足立区や東京藝術大学も運営にかかわっている。こうした場所は運営団体の意思だけでは続けられません。でも、だからこそ事業を続けるうえでは運営団体側と場所の提供側で目的や言葉を擦り合わせたり、信頼関係を築いたりすることがすごく大事だなと思います。

―― 飯島さんと加藤さんの映像のなかで、お二人とも自分がいなくなっても拠点が続いてほしいと語る姿が印象的でした。拠点を時限的にもつという考え方もありますが、長く続けることにはどんな意義があると感じますか?

入江 くるとの場合は、神津島にあのようにこどもが実験的に遊べたり、外から移住してきた人が気軽に集まれたりする場所がないことが大きいと思います。飯島さんたちとよく話すのは、「ハレとケ」のハレのように外から表現者を呼ぶお祭り的な企画もあるけど、並行してケ、つまり日常のなかのクリエイティビティを耕したいということ。くるとではこどもが素材を組み合わせておもちゃをつくったり、土を掘って池にしたり、大人がウクレレや踊りの部活をしたりしていますが、そうしたことができる場が生活のなかにあることを大切にしているんです。

2011〜2021年まで共催していた『アートアクセスあだち 音まち千住の縁』の拠点である仲町の家（左）と現在共催中の『ACKT（アクト／アートセンタークニタチ）』と運営メンバーが重なる国立本店（右）。それ以外の拠点はp.25へ

―― 拠点はハレのための場所としても使えるけど、「ケ＝日常を地ならしするための場所」でもあるんですね。

入江 さらにくるとを起点に、そうした場が島内にもっと増えてほしいですね。

小山 飯島さん自身がIターンで島に来た人だから、出身者とは違い、いつか島を出るかもしれないという意識がある。だからこそ、自分がいなくなったあとの島の日常まで見据えて、続いてほしいと思うのでしょうね。その意味では、拠点があり、それが続くことで、プロジェクトが属人的ではなくなり、個人を超えた時間軸をもつという言い方もできる。

入江 ファンファンが協働する墨田区にある福祉施設「興望館（こうぼうかん）」がまさにそうですね。100年前にセツルメント運動（英国発祥の社会福祉運動）の一環で施設をつくった人たちの想いがいまも拠点に流れている。そう考えると、一時的に公民館などを借りて活動することもできるけど、それと拠点をもつことの違いは記憶の「溜まり具合」ですよね。くるとにもさまざまな活動の痕跡が残っていますが、それらが時を超えて誰かに発見され、また新しい何かが生まれるかもしれない。そうした蓄積と広がりにも、拠点を続けることの意義はあるなと思います。

川満 わたしが担当する『KINOミーティング』（以下、KINO）は共催事業のなかで唯一拠点がありませんが、先日メンバーとその話をした際、海外に（も）ルーツをもつ人々と映画制作を通じて集まるその活動を「ピクニックシートを広げているような感じ」と表現していてグッときました。いまの話で言えば、仮設的に広げるそのワークショップというピクニックシートにも、回を重ねるごとに記憶や人の出会いが蓄積されている気がしていて。移動しながら集まって作品を残すこのやり方が、KINOらしい「拠点」なんだと思います。

小山 そもそも東京アートポイント計画は拠点形成事業ではあるけれど、その拠点は必ずしも物理的なハコではなく人が集まる場のこと。その意味では、どの事業も人がかかわりながら互いに変わっていく仕組みをそれぞれに考えていて。だから、「拠点づくりがアートプロジェクトそのものじゃん」って思いますね。人が集まって、入れ替わったり実験したり方法を変えたり、そこから何かが生まれたり記録を残したり。一つの場をきっかけに人が交流して豊かになっていく。それが東京アートポイント計画だし、そうした場が日常のなかにあることが重要なんだと感じました。

入江 しかも、場に蓄積された記憶が、個人を超えた時間軸で地域に影響を広げることもありますよね。例えばいつも来ている小学生が、大人になってからふと同じような場所をつくりたいと思うかもしれない。アートプロジェクトではよく「耕す」という比喩を使いますが、さまざまな記憶や経験が混ざり合って、まちや日常が豊かになっていくことにつながっているのかなと思います。

川満 映像のなかで、吉田さんが事業の目的は「縁をつくること」だと話されていましたよね。それだよな、と思うんです。それぞれの拠点やそこで実施される事業にはいろんな目的やあり方はあるけど、こうした活動をしている理由は、誰かと出会う喜びや違ったものを知る楽しさという、生きるうえでの基本的な力を得ることでもあるなと。その縁がもしかしたら明日や10年後を少し豊かにするかもしれない。そうした種まきをしているのだと思います。

「いる」ことから越境が生まれる

佐藤李青
SATO Risei

記録から表現をつくるチーム『カロクリサイクル』。団地内に立ち上げた拠点を通して、暮らしのなかで活動していくことについて語ります。

会話から生まれる活動

――『カロクリサイクル』は、江東区にある大島四丁目団地に拠点「Studio 04（ゼロヨン）」を立ち上げ、展覧会を開きました。なぜこの場所だったのでしょうか?

大島四丁目団地は、都営新宿線の西大島駅から徒歩5分の立地にあり、約2500戸の大型団地です。江東区の城東と呼ばれるこのエリアは1960年代、大規模な工場が郊外に移転し、跡地に団地が建てられました。しかし団地の整備から約半世紀以上が経ち、建物の老朽化や住民の高齢化が課題となっています。管理者であるUR都市機構（以下、UR）は団地再生にあたり、新たなまちづくりを構想するなかで、以前よりさまざまな社会実験を試みていました。

それに加え、江東区は東京大空襲や関東大震災、水害などの経験があるエリアで、禍録（かろく）（被災を経験した土地に蓄積されてきた記録物）を扱うプロジェクトとしては、この地域でリサーチを続けたいという意志もあり、1階にある団地の玄関のような場所に拠点を構えることになりました。

ここは、しばらく空き店舗だった部屋で目の前には公園もあり、バス停が近く人通りの多い立地です。4月頃から掃除をはじめたのですが、全面ガラス張りのため、明かりが灯るだけで「何をやっているんだろう?」と目を留める人や声をかけてくれる人が多かったそう。たくさんの人が住んでいるところに「お邪魔している」という感覚になるのは、団地という場所ならではだなと思います。

本棚を整理していると「夫が元特攻隊員で戦争の資料があるのだけれど引き取ってもらえるかしら」と聞かれたこともありました。「家じまい」をしているけれどこれだけは捨てられないと。カロクリサイクルを行っている一般社団法人NOOKのメンバーがコピーさせてもらうと「ありがとう」とお礼を言われたそうです。

――掃除の段階から団地に住む人たちと交流が生まれていたんですね。その後、開催した「とある窓」はどんな展覧会ですか?

「とある窓」は、以前もNOOKが仙台で実施した展覧会の江東区版です。「窓」に関連するエピソードを聞き書きし、そのテキストと写真家・森田貝海（ともみ）さんによる窓の写真を展示するというもの。取材をしたのはNOOKのメンバーと公募したリサーチャーです。リサーチャーは定員4名に対して30名ほども応募があり、10名に枠を広げました。取材先は団地に50年以上住むYouTuber、東日本大震災で被災した岩手出身の学校教員、イタリア料理店のシェフ、9歳のネパール人のこども、戦時中に生まれた自転車屋の店主など団地や近隣に住む11名。語りからそれぞれの半生や暮らしが浮かび上がってきました。

例えば4人家族で暮らすインド人の主婦の話では、エンジニアである夫の仕事で日本に来たことや、こどもたちが通うインターナショナルスクールが近くにあるからこの団地を選んだこと、自身も大学院で有機化学を学び、その関連の仕事に就くため日本語を学びたいこと、こどもたちには日本人の友だちもいたらいいなと思っていることなどが、1500字ほどのテキストで綴られていました。

リサーチャーのなかには英語を話せる人もいて、日本語が母語ではない人にも話を聞いています。この団地にはインドやネパールの人が多く暮らしていますが「日本語を学びたいんだけれど」と声をかけられて、そこから取材につながることもありました。英語で聞いた話は和訳して展示しましたが、取材先のインドの方が「ひらがなだったら読める」と教えてくれて、「やさしい日本語」を用意しました。それもかれらとの会話があったからわかったことでした。

形容し難い場所を応援する人たち

――チームのなかだけで完結せずにいろいろな意見を取り入れてつくった展覧会だったんですね。どんな人が見に来ましたか?

ふらっと立ち寄った人や遠くから来場した人。それからNOOKメンバーのアーティスト・瀬尾夏美さんの言葉を借りると、ただ「応援しにくる人」も多くて、実は掃除をしている頃から見ていて、展示がオープンしてから「がんばれ」と声をかけてくれる人が一定数いるそうなんです。

URの担当者との定例会では「すごいことが起こってる!　なんとも言い難い場所だ」と評価されていました。NOOKのかかわり方によって人が自然に混ざり合う状態が生まれている、と。これまでインドやネパールから来た人が多いことは話ではわかっていたものの、それがどんな人たちで、どのように暮らしているかを知る手立てがなかったそうなんです。「形容し難い」というのは言い得て妙で、お店のようにこちらが提供するものがはっきりしないからこそ、さ

展覧会「とある窓」の様子（撮影｜森田具海）

まざまな関係性を呼び込んでいるのかもしれません。

Studio 04に来る人たちと話をしていると、いろんなことが見えてきます。例えば先ほどの戦争資料を持ってこられた方は80代ですが、一人暮らしで大きなものが運べないといった生活の困りごとがあったり、インドやネパール出身者のなかには転勤が多いため短期在住の方もいたり。「高齢化」「多文化」といった社会課題は団地の課題としてもありますが、一人ひとりに出会い、話を聞くことで、具体的な生活やそこでの困難が浮かび上がってきました。それは「社会課題」として認識される前の個人の「困難」でもあり、この場にいればいるほど見えてきます。その困難を文化事業としてどう受け止めるのかは、これから考えていく部分だと思っています。

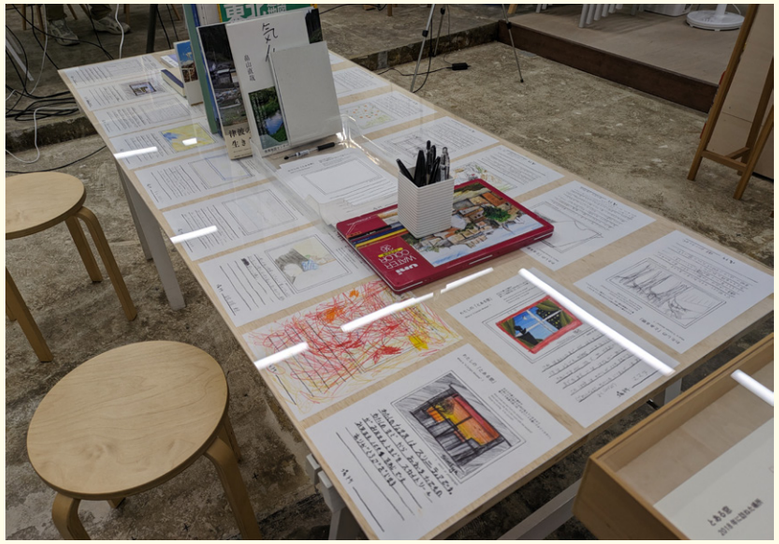
痛みや困難を話せるところ

――「困難」というキーワードが、これからの活動や拠点運営にどのようにかかわってくるのでしょうか?

これまでやってきたワークショップや展覧会などのつくり方や実施方法を変えてもいいかもしれません。「とある窓」で、展示を見ている人のほかに本を読んでいる人、窓のワークシートに絵を描いている人、日本語を練習している人、ただ座っているだけの人などいろいろな「いる」が生まれていたように。別の目的で来たけれど自然と自分の話をしてしまうような、肩書きを名乗らずとも安心して語り合える場所であれたらいいなと思います。

現在は、近くにいる人の困難さえ想像しにくい社会になっていると思います。「課題」は他者と共通したもので解決できそうに思えますが、本当は「困難」の集合体が課題と言われている場合もあるし、課題にすることでこぼれ落ちてしまう困難もあります。

カロクリサイクルは、災禍の記録を通じて一人ひとりの痛みや困難と向き合ったり、想像したり、共有したりする作業をしています。困ったときに頼れる場所としての医療や福祉、行政、法律なども重要ですが、分類できないような困りごと、自分でも認識できないような困難は、誰かに話すことで見えてくる場合もありますよね。痛みや困難を安心して共有できたり、交換したりすることで、違う方向へ進むきっかけになるかもしれません。そうした他者とのかかわりから生まれた小さな「越境」がたくさん起こっている。その人の経験や考え、感じたことを、社会での役目や肩書きを離れ、曖昧なままでも交換しはじめられるのは文化だからこそ、と考えています。



会場の机の上にはワークシートがあり、来場者が自分の「とある窓」について書いたエピソードと絵が並んでいた

構成 | 佐藤恵美

つなぎ手になって卒業する

大内伸輔
OUCHI Shinsuke

最終年度となった3団体。東京アートポイント計画との共催を経て どのようなチームになっているのかを振り返ります。

自分たちの力を試すフォローアップ期間

――『HAPPY TURN／神津島』(以下、HAPPY TURN)、『Artist Collective Fuchu [ACF]』(以下、ACF)、『ファンタジア!ファンタジア!―生き方がかたちになったまち―』(以下、ファンファン)が卒業となりました。どんな1年だったのでしょうか?

3団体とも東京アートポイント計画で共催をしてから今年で6年目です。当初は5年で終了予定でしたが、2020年からコロナ禍による活動制限のため、予定していた事業が十分にできない状況がありました。そこで今年はフォローアップ期間として延長。年間予算は3分の1ほどに縮小していますが、そのぶん自分たちの力を試す機会として、資金集めや自主事業の開発を軸にしながら、これまでの活動を振り返る1年になったんじゃないかなと思います。

――フォローアップ期間には何を重視したのでしょうか? また、卒業後に期待することについても聞かせてください。

まずHAPPY TURNは、「くると」と「Room SAKU」の2拠点を運営していますが、後者をアートポイントの事業から外し、収益事業ができるようにしました。チャレンジショップのようにかき氷屋やカレー屋など島の人がやりたいことをやってみる場所になっています。また助成金も獲得し、これまでにかかわりのあったアーティストと再度プロジェクトを企画しています。定期刊行物や「くると冬まつり」を継続していることで認知度も少しずつ上がっていて、神津島村からの依頼で結婚促進事業を請け負ったり、コンテンポラリーダンスをやっていたスタッフが、小学校の運動会の競技の振り付けを考案したりもしました。

人材バンク的に頼りにされる一方、HAPPY TURNの若者に手を差し延べ教えてくれる人たちも現れてきています。「くると冬まつり」では音響システムがなくて困っていたら「貸すよ」と言ってくれた人、パ

『HAPPY TURN／神津島』(p.26)の拠点「くると」の様子

フォーマンスに盛り込んだ、村に伝わる伝統的な祭りの掛け声を、「本当のやり方はこうだ」と合いの手で支えてくれる人もいました。これはこの6年で活動が評価されていることの証で、それだけでも大きな財産。人とネットワークの情報が集まりつつあるHAPPY TURNは、わたしたち東京アートポイント計画のような中間支援組織でもあり、地域を拠点とするNPOの理想の姿だと思います。

人や情報をつなぐまちの中間支援

―― 次に府中市で活動するACFはいかがでしたか?

ACFは、アーティストたちのゆるやかなつながりで、府中市を「住みよいまちにしたい」と活動をスタートしたものの、何をどう進めようかと悩むことが多かったチームでした。ですが3年前から事業評価にロジックモデルを取り入れることで、最終的な目標やそのために達成すべきことなどの方向性が整理されました。

3年前に「ラッコルタ –創造素材ラボ–」(以下、ラッコルタ)という地元企業が提供してくれる不要な部材を使った、アーティストによるワークショップをはじめたことも大きな転換点でしたね。最近では行政や老人ホーム、保育園などから依頼や相談も増えています。部材を提供する企業は15社ほどあり、梱包用の段ボールを彫刻の素材にしたほか、墓石のサンプルでシンセサイザーのように触れると音の出る作品をつくるワークショップも開催しました。馬の足につける蹄鉄(ていてつ)の部材も出番待ち。多磨霊園があるから墓石、東京競馬場があるから蹄鉄、と府中の地域性を象徴する素材に出合えるのも魅力的ですよね。

『Artist Collective Fuchu [ACF]』(p.26)の展示風景(撮影|深澤明子)

現在、数十人いるメンバーが一人ひとりハブとなって、行政や企業、まちの人たちをつなぎながら市内のいろいろな場所で活動していますが、来年度には6年前まで府中市内で開催していたアートフェスティバルをまた復活させたいそうです。フェスティバルの運営に疲れ果ててしまったことがわたしたちと共催するきっかけの一つでもあったのですが、いまはマネジメントのスキルが上がり、運営の適正規模を考慮しながら事業設計できるようになったので、きっとうまくやれるでしょう。

―― 最後に、墨田区で活動するファンファンはいかがですか?

ファンファンも収益事業の実験と、拠点の特徴が生まれた年でしたね。2年前から「藝とスタジオ」という拠点を運営し、デジタル孔版(こうはん)印刷機のリソグラフを使ったワークショップを定期的に開催しています。今年はそのワークショップを、より幅広い人々に使ってもらえるよう毎回コンセプトを設定し、有料にしました。またディレクターの青木彬(あきら)さんはキュレーターの傍ら社会福祉士の資格取得を目指しています。その自習室としてオープンスタジオをしたり、トイレが2階にあるため、車椅子で利用できる近隣の公衆トイレをマップにするなど、多様な来場者を想定したオルタナティブスペースのあり方を考えていきました。

藝とスタジオはワークショップやイベントなど何かをつくる「スタジオ」でありながら福祉の情報もストックされ、アートと福祉の両分野の人が集まって対話できる場所になっています。この拠点をハブとして活用しながら地域のニーズを汲み取り、公的な機関や民間との連携を通して新たな働きを生み出していけるといいなと思います。

『ファンタジア!ファンタジア!―生き方がかたちになったまち』(p.27)の拠点「藝とスタジオ」での活動風景

綿毛のように思考の種が飛んでいく

―― 三者三様に卒業していきますね。

どのチームもこの6年でいろんな経験を積みました。中間支援における「先を見据えて間に立つ」というマインドが団体側にも伝わり、それぞれの地域で中間支援を行うような存在になっています。

―― 自分たちの事業を企画して実施するだけでなく、さまざまな人の間に立ち、支援も行っているということでしょうか?

というよりも、やりたいことをしながら自然とつなぎ手になっている状態だと思います。自主企画を実施するために、行政・企業・専門家・地域などとさまざまなかかわりをつくることで間に立っている。アートは、いわゆる歌舞音曲(かぶおんぎょく)といった華やかなイメージもある一方、問いを立てたり、異分野をつなげて出会いを生んだりする側面もあります。この3団体はまさにそれを体現していて、それぞれの間に立つことで「問いを立てる」「つなぐ」ことにかかわる人が増えています。

いまの社会に必要なのは、既にあるものを消費するだけではなく、こうした目の前の状況を疑い未来を考えることではないでしょうか。結果が出るのは20〜30年後かもしれない。でもこうした草の根的なことでしか社会は変わらないと思うのです。文化政策を研究している小林瑠音(るね)さんの『英国のコミュニティ・アートとアーツカウンシル―タンポポとバラの攻防』(水曜社、2023年)にある言葉を借りると、アートには「最高級のバラ」だけではなく「路傍(ろぼう)のタンポポ」もある。道端に咲いたタンポポは、花が咲いてやがて綿毛になり、無数の種を飛ばし、そこからまた新しい芽が出て花が咲きます。

東京アートポイント計画は2009年にはじまりましたが、当初は「千の見世(みせ)」という事業名で、人々が交流する拠点をあちこちに出現させることを目指していました。14年間で共催した団体の数は千には及びませんが、現場で思考の種を受け取って自分も何かやってみようと思った人がいるとしたら、もう千になっているかもしれません。中間支援の種を育み、小さな変化の連鎖をつくること。その積み重ねが、よりよい社会を耕すための営みであると信じています。

構成｜遠藤ジョバンニ

現場の足腰をつくる事務

櫻井駿介
SAKURAI Shunsuke

**チームや組織内の足並みを揃えるために必要なツールとはどのようなものなのか。
企画を現実にするために、つくることを支える事務の働きについて語ります。**

向かい合って話すためのツール

―― これまで東京アートポイント計画では、東京都と活動を共有する「月次報告書」や共催団体と事業の目的や成果を確認する「総括評価シート」をつくってきましたよね。2023年はどのようなツールを作成しましたか?

今年は「契約進行表」と「企画・契約フロー」「Tokyo Art Research Lab（TARL）ウェブサイト運用マニュアル」を作成しました。契約進行表は、わたしたちプログラムオフィサー（PO）が実施したい企画を課内で承認する際に、企画書とセットで使う資料です。「企画・立案」「起案・契約」「情報発信」のフェーズごとに、いつまでに・何を・どんなふうに準備しなくてはいけないのかがチェックリストになっています。企画・契約フローと照らし合わせながら使うことで、企画段階から終了まで、全体の見通しを立てることができます。

このツールは個人で活用するというよりも、このフローに書き込んだ内容やスケジュールを表に出して共有することが目的なんです。これまではPOが個々に過去の資料を調べたりしながら、企画や契約、スケジュールを管理していたのですが、それでは自分自身でミスやトラブルが防げない。同じテーブルで向かい合って話すための基準をつくりたかったんです。

例えば上司に決裁を取る際にもこれを見ながら「これから何回やりとりがあるね」「いまここだから順調だね」と両側から指さし確認ができるし、通常よりスケジュールが押してしまったとしても、はじめに想定した基準があれば「これくらい遅れているけど、ここが詰められそう」と柔軟に対応することもできる。経理などの別の部署の人とも現在地を共有して先々まで見通すための心構えができます。

―― 資料を通して、コミュニケーションがより円滑になったんですね。TARLウェブサイト運用マニュアルはどのようなものですか?

これは2022年にリニューアルしたウェブサイトの更新方法についてまとめた一冊（32ページ）です。これを読めば一通り使い方がわかるように順を追って解説し、運用画面と連動した平易な言葉選びをこころがけました。一般的なマニュアルと異なる点としては、なぜウェブサイト改修をすることになったのか、誰とどのように進めたのか、その設計思想や知見も記したことですね。ウェブアクセシビリティへの対応方法や、画像への代替テキストの書き方についてもポイントをまとめています。

ウェブサイトに限らず制作物には、それをつくった人たちが大切に感じていることが表れますよね。なので、例えば組織内で担当者が変わったとしてもそのときの想いが途絶えてしまわないように、企画や運用を考える手がかりを残したかった。そのためには、つくった当時の視点やプロセスといった「設計思想」を引き継げるようにする必要があるなと思いました。

誰が担当者になったとしても、その人なりのモチベーションをもって更新し、必要なときが来たら次の改修に取り組んでほしい。そのためにマニュアル自体も更新しやすいフォーマットで組んでいて、1年ごとにウェブサイト全体を見直すタイミングもつくりたいと考えています。

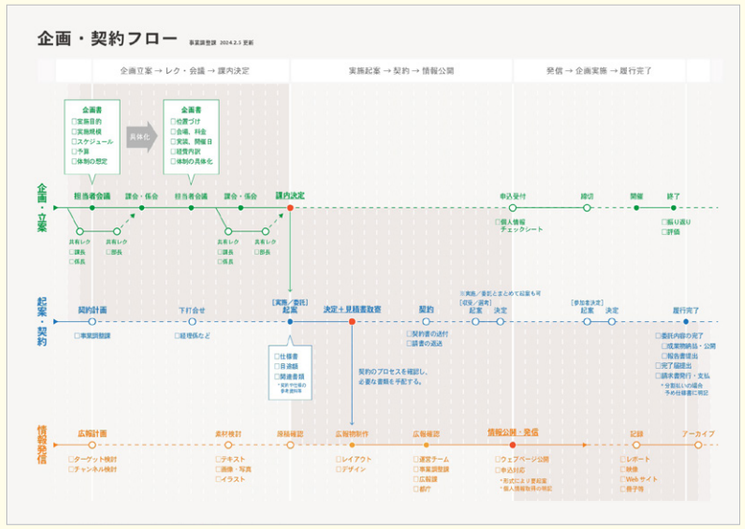
プロジェクトを支える「頭」と「足」

―― こうした事務的な作業は、アートの現場においてどのような役割があると考えていますか?

マネジメントやオペレーションなどの管理や運営業務にまつわる「アドミニストレーション」と呼ばれる事務は、現場づくりの土台だという感覚がずっとあります。この重要さを理解してもらえていたからこそ、地味なマニュアルやフォーマットづくりもPOの仕事だと組織内で見なしてもらえたんじゃないかなと。

アートプロジェクトや作品制作を思い浮かべると、アイデアが最初の出発点だと思われがちですが、それを実行する足がかりになるのは「契約」や「お金」「スケジュール」ですよね。さらに細かくみれば、まず打ち合わせがあり、その前に誰かがアジェンダを決めて事前資料をつくります。アイデアがプロジェクトの「頭」なら、こうした事務は「足」です。地に足をつけて一歩ずつ歩みを進めるからこそ、だんだんとプロジェクトが前に進んでいく。

経理や契約に代表される事務作業は、自分と相手、お互いの信頼関係を築くために積み重ねていく基盤づくりなので、斬新なアイデアで飛び越えることはできません。だから丁寧にこつこつと、システムやフローをつくることが大切なんですよね。それが契約相手や、同じ組織やチーム内での信頼につながる。プロジェクト全体における代替できない役割と捉えると、日々の事務作業に対してもモチベーションが上がりますね。



「契約進行表」と「企画・契約フロー」

「Tokyo Art Research Lab（TARL）ウェブサイト運用マニュアル」の表紙と設計思想のページ

── 事務がさまざまな人々との「接点」ならば、そのなかで用いられる言葉遣いも、対象によって変わりそうですね。事務書類における言葉づくりはどのような意味をもつのでしょうか？

代表的な事務書類といえば、仕様書などの契約書類ですよね。仕事柄、こうしたものに目を通す機会が多いのですが、わたしは仕様書づくりがとても好きなんですよ。一見すると、禁止事項が列挙されているように見えるので苦手意識をもつ人は多いと思いますが、制約や条件があるからこそそれを前提に、企画をつくったり、詳細を詰めていったりできる。さらに、いかにあなたの権利を守るか、という意識で向き合うことも大切にしています。

例えば、東京アートポイント計画は共催事業であり、共催団体とは対等な関係ではあるものの、どうしてもお金の流れや協定を取りまとめる側として、わたしたちの立場が強くなりがちです。業務委託の契約や進行管理についても同様に。なので、できるだけ相手の立場を想像しながらやりとりをしていきたいと思っています。

すべては企画を現実にしていく作業

── 今回、事務を切り口に話を聞きましたが、あらためてPOの業務は多岐にわたりますね。

POやアートマネージャーの資質は、何でもできるゼネラリストであることだと言われることがあります。でも、本人からすればゼネラリスト的な働きは結果であって「何でもやらなければならない」状況に追いこまれていることもあると思うんです。そして、事務作業が「手間」として捉えられてしまう。でも、これまで触れてきた数々の事務が自分の足場となって、自分の専門性を発揮できることもあるし、そこにはPOだからこその「伸びしろ」がある感覚があります。

契約や経理の事務を経験しているから、事務局と話すときにも言葉のチューニングが合う。領収書の日付や科目に目を通すだけでも、プロジェクトの風景が思い浮かぶ。一見すると現場と関係なさそうに見えても、事務をやっているからこそ、POとしても深度のある議論やアドバイスができるんだと思います。オフィスで予算書をつくりながら電卓を叩くのと、アートプロジェクトの現場で釘を打つこと、両方とも企画を現実にしていく作業に変わりありません。

ようやくマニュアルやフォーマットづくりは一段落しました。その一方で、東京アートポイント計画がはじまって15年が経ち、組織やチームにとって参考になる知見や事例が溜まってきたなと感じます。ただ、紙でしか残っていなかったり、共有サーバーの奥深くにバラバラになって眠っていたりするものが多いので、これからはそれらを整理して、知りたい情報にすぐにアクセスできる仕組みづくりに着手したいですね。

構成｜杉原環樹

小さな単位に働きかける仕事

森 司
MORI Tsukasa

文化事業者にとって2023年はどのような年だったか。困難な時代のなかで文化の役割について語りました。

包摂的で中間支援的な事業

── 2023年は東京アートポイント計画にとってどんな年でしたか？

Artpoint Meetingを3回開催できるなど、コロナ後の再始動感がある一方で、コロナがもたらしたものの実態に出会いはじめた年でした。イベントは普通に行えるけれど、以前と同じOS（オペレーティングシステム）のままで文化事業を行うと何かが違うと、開催する側も参加する側も感じている。では新しいOSとは何かというと、まだ見えない。そんなギャップを感じた年でした。

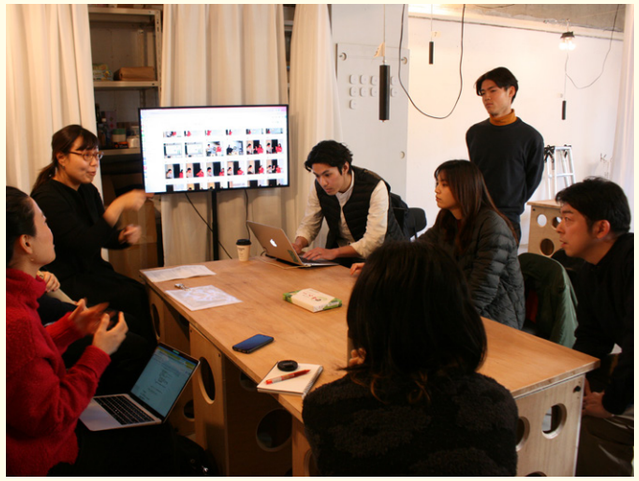
こうした時代とのズレ感は、現行の社会動向に合わせた大きな催しなど、「旬」な事業の現場でより強かったのではないでしょうか。それに対して2022年から共催する『カロクリサイクル』『KINOミーティング』（以下、KINO）『めとてラボ』は、どれも普遍的な課題やこの社会の歪みに向き合っている。それらは決して派手ではなく、一見アートプロジェクトに見えにくいのですが、非常にインクルーシブで、日常とのかかわりを標榜してきた東京アートポイント計画の一つの到達点だと思います。

── その3事業がインクルーシブであるとはどのような点ですか？

いわゆるアートピープルだけではなく、当事者と呼ばれる方を含む多様な人たちが参加している点、そして一方的に誰かが何かをするのではなく、互いに学び合っている点です。しかもその学びの相手は

『カロクリサイクル』（p.28）の活動風景

『KINOミーティング』（p.29）の活動風景



『めとてラボ』（p.29）の活動風景

人に限らず、自然や歴史なども含む。これらは東京アートポイント計画が初期に行っていたスター作家を中心にした事業とは明らかに異なります。

この3事業がそうした動きができるのは、その担い手がデザイナーやインタープリター（通訳）、あるいは人に話を聞くアーティストと、もともと媒介者的な背景をもっていたからだと考えています。運営するNPOが、従来わたしたちプログラムオフィサーが担っていた社会と課題をつなぐ中間支援的なふるまいや役割を開発し、機能させているのです。

例えばKINOでは海外に（も）ルーツを持つ人々と映画制作を行っていますが、ここでのポイントは集まる目的を「映画制作」にして、個人の属性をあくまで「その参加資格」としている点です。このことで多くの人が気軽に参加でき、日本にいる長さや日本語能力にグラデーションがある人たちがゆるやかに出会う機会も生まれています。

めとてラボでは、両親がろう者でこどもが聴者、またはその逆、あるいはデフファミリーなどさまざまな家庭で育ったメンバーが集まり、生活のなかの手話やろう文化が育まれる場について考えていますが、ここでも「この問いに関心がある人はどうぞ」というひらき方をしています。そして重要だと思うのが、そこで集まった人々が受け身の参加者ではなく、個別の背景や当事者性をもつ「プレイヤー」、個の集合体として活動している点です。

わたしたちはどうしても「ろう者」「被災者」「海外にルーツをもつ人」などを一括りで見てしまいがちですが、この3事業は中間支援的な仕組みをつくりながら、「個人」と丁寧に向き合っている。そうした点も従来のNPOとは異なる特徴だと思います。

「1.5」の領域に文化の仕事がある

―― 2023年、特に印象的だったその3事業の活動は何ですか？

秋にミニシアターで行ったKINOの映画上映とトークが印象的でした。登壇者と観客がほぼ同じ小さな会ですが、場のマネジメントの仕方や参加者間の関係を含め、プロジェクトとして何かを掴んでいる雰囲気があって、メンバーにとってこの集まりが居心地のいいものになっているのを感じましたね。心理的安心感をもってリラックスできる場、個人が許容される場が生まれている点は、ほかの2事業にも共通します。

僕は最近、我々の事業は「1.5」の領域を目指すべきではないかと考えています。家を第1、職場や学校を第2の場とし、それとは別の第3の居場所をサードプレイスと呼びますが、いまの時代はこのそれぞれが決して安定的でも十分でもない。家庭内の状況が大変で第3の場所に行く余裕がないこともある。そこで重要なのは、1・2・3を確固たるものとして大雑把に分けるのではなく、それらをつなげたり、その中間領域を見ようとしたりする意識ではないでしょうか。

例えば、団地のなかにあるカロクリサイクルの拠点は住民にとって家の少し外にある1.5的な場所と言えます。また、『ファンタジア！ファンタジア！―生き方がかたちになったまち―』が福祉の世界と協働したり、『Artist Collective Fuchu［ACF］』が地元企業が提供してくれる不要な部材を使った創作活動をしたりすることも、扉を少し開けて二つの領域をつなぐ1.5的なふるまいでしょう。「1.5」という言葉を用意することで見えてくるそうした「あわい」こそ、いま、文化が一番機能する領域だと考えています。

―― 1.5的な領域に文化の果たせる役割があるのはなぜでしょうか？

人々が生きづらさを感じ、あらゆる領域が膠着（こうちゃく）して行き詰まるなかで、文化にはものの見方や視点を変えるという性質があるからです。例えば、福祉の現場でいう「お散歩」や「お出かけ」を、文化の人は「リサーチ」と呼ぶことで人の意識を変えられる。まちを集団でさまよっていたら不審がられますが、KINOはそれを「映画制作」と呼ぶことで成立させ、参加者が見る世界を変えます。こうした視点の転換はとても基本的な文化の機能で、地味に感じるかもしれません。けれども、いまわたしたちの仕事はそうした小さな単位にあると感じています。

困難な時代に必要な文化の基本的な力

―― 話題に上がった3事業をはじめ、東京アートポイント計画のアートプロジェクトのかたちが変化してきているのでしょうか？

そう思います。そもそもわたしたちの言うアートは「当たり前を問い直す」と同義です。この3事業は既存のアートのOSそのものを問うような実践をしている。この「新しさ」ゆえに、語ったり理解したりすることが難しいのですが、だからこそ次の時代に求められるそうした領域の研究・開発は東京アートポイント計画がやるべきだと考えています。

その意味でいま手がけているものは、従来のアウトプット、いわゆるアートピース的なものとは異なります。先ほどの小さな視点の転換もそうですね。事業がこのように変化している背景には、わたしたちがこの数年間、アクセシビリティに関する取り組みを通じて「エイブリズム（Ableism）」的な価値観に敏感になったこともあるかもしれません。エイブリズムとは健常者中心主義的な価値観で、人を「できる」「できない」で二分し、「できる」ことを優れていることとする差別や社会的偏見を意味します。いまの社会はエイブリズムで溢れていますよね。

けれど、何かを「できない」ことも、病気や障害のある身体が見せるものも、個別の身体のひとつの「表現」です。1.5と同じように、「できる」「できない」の間には実は豊かな世界があるのではないか。それをもっと丁寧に見ないといけない。従来の価値観が急速に崩れている時代だからこそ。

そうした時代においては、コンテンツ的に消費される文化ではなく、価値観を問い直すクリエイティブな文化が必要だと思います。その「クリエイション」は日常から遠い何かではなくて、先ほどの見方や視点の変化のような、小さくて基本的な文化の営みのこと。この困難な時代に、そうした文化の力を当事者として必要としている人は多いでしょう。

トレンド的なものではなく、小さいけれど普遍的でなくならない、そうした丁寧な仕事をすること。それがいま、文化事業者に求められていることだと思います。

事業予算

東京都の年間文化振興予算は、177億1300万円です。そのうち公益財団法人東京都歴史文化財団の一組織であるアーツカウンシル東京は、40億3100万円。わたしたちは、年間「9100万円」（外部予算を含む）の予算規模で動いています（令和5年度）。予算時点での概算にて、事業予算についてご紹介します*。

東京アートポイント計画　9100万円 ［財団予算8700万円+外部予算** 400万円］

＊金額はすべて「約」です。　＊＊基礎自治体負担金等。

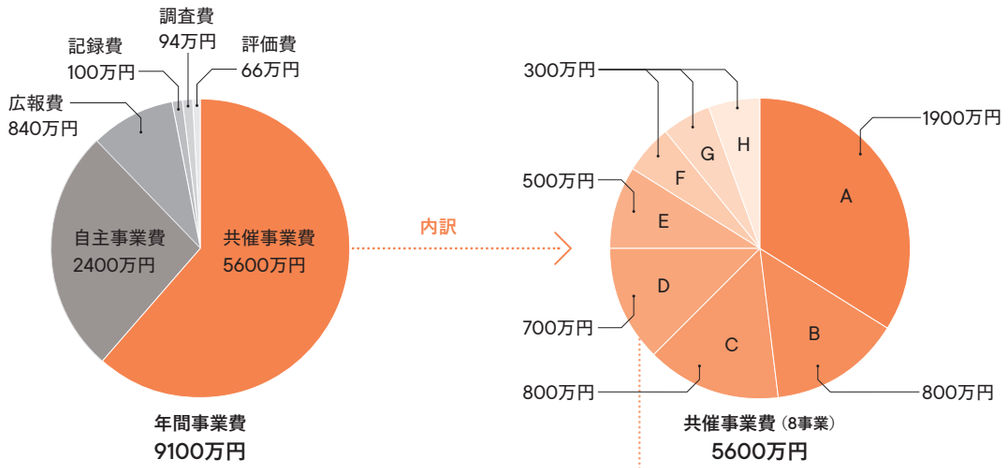
東京アートポイント計画では、共催団体と協議し、毎年予算計画を立てています。どのくらいの規模であれば、無理なく運営ができるのか。事務局を担うNPOの体力や伸びしろを見極め、予算を調整。2年目以降の事業は増額してマネジメント力を鍛えたり、あえて減額して活動の質を高めたりするなど、常に事業の適正規模を探っています。

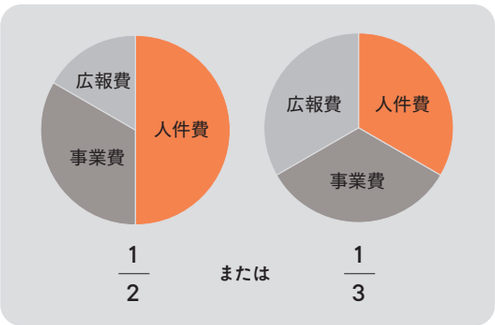
［東京アートポイント計画の年間事業予算内訳］

事業予算の大部分は、「共催事業費」です。そのほかに次代のプログラムの担い手を育てる「自主事業費」、共催団体を含むすべての活動の「広報費」、出張や書籍購入などに使う「調査費」、事業の「記録費」「評価費」があります。

［各共催団体の年間事業予算内訳］

共催期間や事業の目的、特徴に合わせて、適正規模を協議。立ち上げは500万円からスタートすることが多く、それ以降は外部予算の状況により1000万円以上になることもあります。





割合

［共催団体における予算の割合例］

一般的にアートプロジェクトにおける助成は、企画制作費に対するものがほとんどで、人件費も含めた支援はまだ国内では多くありません。東京アートポイント計画では、持続可能な活動を行うために、共催団体の「人件費」を全体予算の1/2または1/3の割合になるように設計しています。

事業一覧

2023年度の東京アートポイント計画は、都内のさまざまな地域で8つの共催事業を行いました。自分たちの活動拠点を地域にひらいている場所もあります。次のページから、各事業の概要と今年度の取り組みをご紹介します。

都内各所

KINO ミーティング

▶ p.29

国立市

ACKT
（アクト／アートセンタークニタチ）

さえき洋品●（てん）
国立市谷保5014-4
不定期開室

▶ p.27

多摩広域
（東村山市、国分寺市、小金井市ほか）

多摩の未来の地勢図 cleaving art meeting

小金井アートスポット シャトー 2F
小金井市本町6-5-3 シャトー小金井2F
不定期開室
https://artfullaction.net/koganei-art-spot

▶ p.28

撮影｜加藤 甫

台東区

めとてラボ

5005（ゴーマルマルゴー）
台東区谷中3-24-1
不定期開室
https://5005place.com

▶ p.29

墨田区

ファンタジア！

藝とスタジオ
墨田区東向島5-23-3
不定期開室

▶ p.27

撮影｜高田洋三

神津島村

HAPPY TURN ／神津島

くると
神津島村998
毎週水・木・金曜日 13:00〜16:00開室
http://happyturn-kozu.tokyo/about_kuruto

▶ p.26

府中市

Artist Collective Fuchu

やど（仮）
府中市矢崎町4-1
大東京綜合卸売センター 第4通路
不定期開室

▶ p.26

江東区

カロクリサイクル

Studio 04（ゼロヨン）
江東区大島4-1-1
UR都市機構大島四丁目団地1号棟106
不定期開室

▶ p.28

撮影｜仲田絵美

東京アートポイント計画

https://tokyoartpoint.jp

HAPPY TURN／神津島

（撮影｜村上大輔）

島をめぐる「幸せなターン」を見つける

豊かな自然、神話や独特な風習が残る神津島村を舞台に、人々が島での暮らしに愛着をもち、自分ごととして島にかかわる土壌を育むプロジェクト。新たな価値観との出会いや発見によって、自分自身でつかむ変化のきっかけを「幸せなターン」と捉え、これからの生き方のヒントを探る。もともと島に住む人だけではなく、移住者や観光客、島を離れて暮らす人ともつながりながら、それぞれの考え方や文化を学び合う場をひらいている。

2023年度の活動

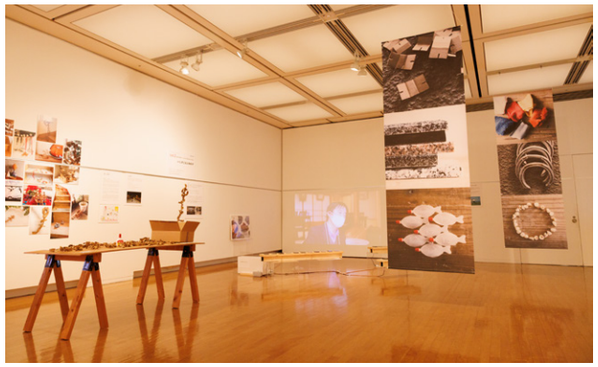
今年度は、拠点「くると」を週に3日間開き、やりたいことをみんなでやってみる「くると部活動プロジェクト」が始動。「畑部」や「まめでんきゅう部」「おどり部」など、スタッフを顧問とした8つの部活動によって、さらにさまざまな世代が交流する場になっている。

「アーティスト・プログラム in 神津島」では、美術家・馬喰町バンドの武徹太郎を迎え、「くると冬まつり2023」を開催。島に伝わる民話に着想を得た演劇を上演したり、神津島の唄や踊り、参加者がそれぞれの得意技を披露したりする時間を設け、島内の人々を巻き込みながら準備をしたことで、誰もが参加できる場が生まれた。今回は「くると」を日常的に利用する人々に加え、神津島の伝統文化に親しい人々も会場を訪れ、ともに楽しんだ。

そのほか、村主催の神津島福祉健康まつりへの出展や、SNSを利用した日常的な発信などで島内外への周知をしつつ、活動の幅を広げている。

共催　一般社団法人シマクラス神津島
場所　神津島村
URL　http://happyturn-kozu.tokyo

Artist Collective Fuchu［ACF］



（撮影｜深澤明子）

「誰もが表現できるまち」を目指して

府中市に暮らす、職種も年齢も多様なメンバーが集まり、身近なところにある「表現」を通して「だれもが表現できるまち」を目指すプロジェクト。異なる視点に触れ、互いの違いを尊重し、自由で活発な表現ができる土壌づくりを行う。行政や企業、市民などさまざまな役割をもった人たちと連携し、プロジェクトを実施している。

2023年度の活動

昨年度に続き、府中市内の企業から提供された不要な部材をワークショップの素材として活用する仕組みづくり「ラッコルタ−創造素材ラボ−」を実施。市主催の生涯学習フェスティバルや、都主催の多摩東京移管130周年イベント等でワークショップを行い、好評を博した。企業や福祉施設、教育施設などからの相談も増え、新たな協働者との出会いにつながっている。

また、アーティストワークショップ「モノモノローグ」では、現代美術家・岡田裕子とともに、参加者がさまざまな素材に触れて対話をしながら「想像」を膨らませる映像作品が生まれた。リサーチプログラム「まなばぁーと」では、持続的な活動を続けていくために「ロジックモデル」をつくり、これからの活動指針を専門家とともに見直した。

そのほか、地域FMでのラジオ番組『おとのふね』の定期配信（月1回）や、かわら版『かみひこうき』の発行（年1回）など定期的な情報発信を続けている。

共催　特定非営利活動法人アーティスト・コレクティヴ・フチュウ
場所　府中市
URL　https://acf-tokyo.com

ファンタジア！ ファンタジア！—生き方がかたちになったまち—

「当たり前」を解きほぐし、創造力を育む

2000年代初頭の住民主導のアートプロジェクトをきっかけに、現在も多くのアーティストが暮らす墨田区北東部（通称：「墨東エリア」）を舞台に、地域の人々がアーティストや研究者との出会いを通じて、豊かに生きるための創造力を育む「学びの場」を生み出す試み。他者との対話で生まれる気づきを通して、自分自身の想像の幅を広げ続け、自分のなかの常識や「当たり前」を解きほぐす小さな実験をしかけている。

2023年度の活動

今年度は、これまでかかわった地域団体や参加者と関係を育み、新たな人々に出会うために、拠点「藝とスタジオ」を交流の場として活用することを目指した。月に約5日間オープンスタジオを開催し、事務局メンバーの関心ごとから「リソグラフ」「アクセシビリティ」「ソーシャルワーク」などのテーマでプログラムを企画。拠点のひらき方のトライアルを重ねつつ、事業に適したオープンスタジオのかたちを探りながら、来場者との交流を深めた。

また、他団体とも連携しながらプログラムを企画することで、新たな人を呼び込み、さらなる関係性をつなげている。「すみだ地域福祉・ボランティアフォーラム」や「すみだボランティアまつり」に参加し、墨田区福祉保健部や社会福祉法人墨田区社会福祉協議会、社会福祉法人興望館などと交流を深め、墨田区内で“福祉とアート”をテーマに活動する団体としての働きを積み重ねている。

共催　一般社団法人藝と
場所　墨田区内各所
URL　http://fantasiafantasia.jp

ACKT（アクト／アートセンタークニタチ）

まちを舞台に編まれる芸術と文化

国立市文化芸術推進基本計画が掲げる「文化と芸術が香るまちくにたち」の実現に向け、行政と市民、そして市外からかかわる人々が交流し、新たなまちの価値を生み出していくプロジェクト。アートやデザインの視点を取り入れた拠点づくりやプログラムを通じて、国立市や多摩地域にある潜在的な社会課題にアプローチする。

2023年度の活動

アトリエやギャラリー、店舗を巡ってまちを横断するプログラム「Kunitachi Art Center 2023」を16日間にわたって開催。公開制作やまち歩きツアーなども実施し、日常のなかで芸術文化に触れる機会をひらいた。また、アートプロジェクトについて考える場として映画『ラジオ下神白—あのとき あのまちの音楽から いまここへ』の上映会を行い、その後の意見交換会では、地域に向けた広報の工夫や、さまざまな立場を巻き込むプロジェクトの可能性について語り合った。

拠点「さえき洋品●（てん）」のオープンに向けては、DIT（Do it together：「みんなで一緒につくる」という意味）を進め、拠点のお披露目とご挨拶を兼ねて、餅つき大会を開催。ここから何かが動きはじめる予感を地域の人々と一緒に楽しんだ。

そのほか、まち歩きやメールニュース、フリーペーパー『〇ZINE（エンジン）』の刊行など定期的な情報発信に取り組んでいる。

共催　一般社団法人ACKT、国立市、公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団
場所　国立市ほか
URL　https://www.ackt.jp

多摩の未来の地勢図 Cleaving Art Meeting

一人ひとりが自分の暮らす足元を見つめ直す

多摩地域の文化的、歴史的特性を踏まえ、その「地勢」を探ることを通して、一人ひとりが自分の暮らす足元を見つめ直すプロジェクト。NPOが中核となって、小学校などの教育機関や福祉施設で働く人たち、地域で暮らす人たちとの実践の場づくりを行う。それによって個々人の抱える切実な社会課題に向き合うために人々が協働するネットワークの基盤づくりを行っている。

2023年度の活動

小学校の図工の先生とともに素材や技法を学ぶ「ざいしらべ」は、過去最多の14校と連携し、竹や広葉樹といった素材、布の染めや筆づくりの技法に触れる授業を実施。また、アーティスト・五十嵐靖晃が奥多摩町立氷川小学校に滞在し、こどもや住民と交流しながら作品制作を行った。

社会的養護にかかわる支援者のケアに取り組んできた「ゆずりはをたずねてみる」は、「演劇を通して“ケア”を考える連続ワークショップ」へとプログラムを拡張。支援者、子育て中の親、演劇の手法に関心をもつ参加者などが継続的にコミュニケーションを重ねている。

連続ワークショップ「多摩の未来の地勢図をともに描く2023 ―re.* 生きることの表現」は、これまでの活動で学んだ技術を応用し、映画の上映会など自主企画を行った。

暮らしのなかでの小さな問いを持ち寄る「たましらべ」は毎月ディスカッションを行い、大学の研究機関への訪問なども行った。

共催　特定非営利活動法人アートフル・アクション
場所　多摩地域
URL　https://cleavingartmeeting.com

KINOミーティング

異なる「ルーツ」と出会い、協働の場をつくる

海外に（も）ルーツをもつ人々とともに、都内のさまざまなエリアで映像制作を中心としたワークショップを行うプロジェクト。背景の異なる人々との出会いや対話を軸とした映像制作を通して、新たなコミュニケーションや協働のあり方を発見する場をつくり出す。また、参加者が主体的にかかわれるプログラムの研究・開発も目指している。

2023年度の活動

まちを歩きながら、写真と映像、インタビュー音声を用いて映像を制作するワークショップ「シネマポートレイト」を北区と新宿区で開催。今年度は新たに、過去の参加者を対象にした「ステップアップワークショップ」も始動した。参加者が互いの日常生活に密着し、対話を重ねる短編ドキュメンタリーや、「再会」をテーマにしたフィクションづくりにも挑戦し、演技やシナリオ制作、カメラオペレーターなど必要な技術と思考を培う場づくりを行った。

最終日には上映会を行い、詩人・管啓次郎と漫画家・かつしかけいた、写真研究者・村上由鶴、行動学者・細馬宏通をゲストに迎え、言語も文化も異なる人々が協働し、作品づくりに取り組む場の可能性について言葉を交わした。

また、現場では拾いきれない気づきや疑問を共有する場として「（スペース・ルーム）スキマを言葉にしてみるラジオ」の配信を行うなど、対話と作品づくりを基盤としたコミュニティの形成に向けて試行錯誤を重ねている。

共催　一般社団法人パンタナル
場所　都内各所
URL　https://www.kino-meeting.com

カロクリサイクル

カロク（禍録）をめぐる表現とネットワーク

各地に蓄積されてきた「過去の災禍の記録=禍録（カロク）」を読み込み、現在に応用するためのプロジェクト。災禍の歴史をたどり、地域の歴史を掘り起こし、それらに向き合う人々と出会い、話し合い、ワークショップや展示を通じて表現を行う場をつくることから、災間期をともに生きるためのネットワークづくりを目指している。

2023年度の活動

江東区・大島四丁目団地内に構えた拠点「Studio 04」を中心に活動を行った。オープン時には「窓」を巡る語りと写真で構成した展覧会「とある窓」を開催。公募で集まったリサーチャーは地域の人たちに話を聞き、文章にまとめ、展示用の冊子づくりまで行った。開室日には、年代や国籍の異なる住民たちがゆるやかに過ごす場所になっている。

昨年に続いて実施したワークショップ「記録から表現をつくる」では、有志が自らの関心をかたちにする展示も行った。東京と名古屋をオンラインでつないだ「カロク・リーディング・クラブ」では、関東大震災と伊勢湾台風の記録を読んで対話を行ったほか、「てつがくカフェ」を開催した。

YouTubeでのオンライン番組『テレビノーク』ではさまざまなゲストを招き、計12回配信を行った。noteでのリサーチレポート「カロク採訪記」はワークショップ参加メンバーが執筆し、さまざまなネットワークが広がりつつある。

共催　一般社団法人NOOK
場所　江東区ほか
URL　http://nook.or.jp/karoku

めとてラボ

誰もが「わたし」を起点にできる共創の場を

視覚言語（日本の手話）で話すろう者・難聴者・CODA（ろう者の親をもつ聴者）が主体となり、異なる身体性や感覚世界をもつ人々とともに、自らの感覚や言語を起点にコミュニケーションを創発する場をつくるプロジェクト。手話を通じて育まれてきた文化を見つめ直し、それらを巡る視点や言葉をたどりながら、多様な背景をもつ人々が、それぞれの文化の異なりを認め合うための環境づくりを目指している。

2023年度の活動

「デフスペースリサーチ」では、米・ギャローデット大学と筑波技術大学大学院にてデフスペースの研究をしていた福島愛未を招いたイベントを行ったほか、一般社団法人日本ろう芸術協会とともに西日暮里に新たな拠点「5005」をオープンした。内装や什器の設計においても、デフスペースリサーチで得た知見を取り入れ、今後も実験を続けていく。

消滅危機言語である手話の記憶・記録のアーカイブについて考える「ホームビデオ鑑賞会」では、聴者とろう者がともに集い、ホームビデオを見ながらの対話を通して、ろう者の暮らしのなかにある文化や時代の変遷に考えを巡らせた。

また、手話通訳や翻訳の環境に関する技術やツール開発を行う「つなぐラボ」は、『だれもが文化でつながるサマーセッション2023』に招かれ、アーティストの作品を翻訳・通訳していく公開研究ラボを実施。それぞれのプログラムが作用し合いながら、新たな取り組みへと広がっている。

共催　一般社団法人ooo
場所　都内各所
URL　https://metotelab.com

Tokyo Art Research Lab（TARL）

アートプロジェクトの可能性を広げる学び

アートプロジェクトを実践する人々にひらかれ、ともにつくりあげる学びのプログラム。社会における芸術や文化の可能性を広げることを目指し、ゲストや講師とともにワークを行うゼミや講座、現場の課題に応じた技術開発、資料のアーカイブや公開を行った。

2023年度の活動

芹沢高志（P3 art and environment 統括ディレクター）がナビゲーターを務める「新たな航路を切り開く」では、自分のなかから生まれる問いを捕まえ、アートプロジェクトを構想し、動かしていくための力を身につけるゼミや、社会とアートプロジェクトの関係を探る年表づくり、アートプロジェクトの実践者や先駆者たちが語る映像シリーズを制作・公開した。

東京アートポイント計画に参加する団体が集まり、それぞれの悩みや技術を持ち寄って学び合う「事務局による事務局のためのジムのような勉強会」（通称：ジムジム会）では、地域で活動をひらくための「拠点」に着目し、その役割について運営者が対談する動画を制作した。

また、ろう者の感覚を知りコミュニケーションについて考える手話講座や、異なる視点をもつ他者と「ともにつくる」ことを実践する人々の対談をまとめた冊子・映像を制作したほか、アートプロジェクトの担い手のためのプラットフォームとしてウェブサイトを更新し、コンテンツの拡充にも取り組んだ。

場所　都内各所
URL　https://tarl.jp

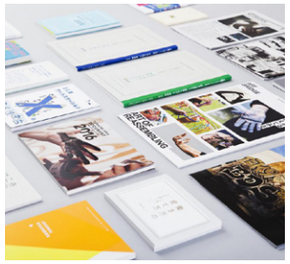
お知らせ Information

Mail News

毎月1回、メールニュースをお届けしています！

アートプロジェクトの現場の最新のイベント情報やレポートなどを「Artpoint Letter」としてお届けしています。希望される方は、こちらからご登録ください。

Book



事業で制作した記録集やメディアをPDFで公開しています。

Tokyo Art Research Lab（TARL）のウェブサイトでは、東京アートポイント計画やTARLで制作した冊子等のPDFを300点以上公開しています。事業運営や研究に、ぜひご活用ください。

https://tarl.jp/archive

『これからの文化を「10年単位」で語るために —東京アートポイント計画 2009–2018—』（2019年）

中間支援の9の条件、これまでの歩み、プロジェクトインタビューやドキュメント一覧など、10年間の試行錯誤を収録。下記にてPDFを公開しています。

https://tarl.jp/archive/artpoint_2009-2018

Artpoint Reports
2023 → 2024

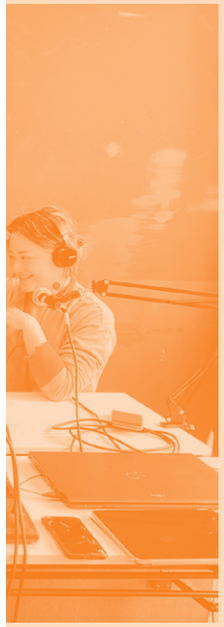
編集｜川村庸子
執筆｜佐藤恵美、杉原環樹、遠藤ジョバンニ
アートディレクション&デザイン｜北岡誠吾
印刷｜株式会社歩プロセス

プログラムオフィサー｜大内伸輔・小山冴子・川満ニキアン（アーツカウンシル東京）
監修｜森 司（アーツカウンシル東京）

発行｜2024年3月25日　第1刷発行

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073
東京都千代田区九段北4丁目1-28　九段ファーストプレイス5階
TEL 03-6256-8435　FAX 03-6256-8829
https://www.artscouncil-tokyo.jp
©アーツカウンシル東京
ISBN978-4-909894-49-6　C0070

営利・非営利問わず、本書のコンテンツを許可なく複製・転用・販売などの二次利用することを禁じます。



アーカイブ

ARTS COUNCIL TOKYO